

大学入学後の学修に対するリアリティショックの研究アンケート結果 —学修に対する意識について—

山下 八重子, 松岡 みどり

看護学部

【はじめに】大学生の受講態度が問題視されている。本学においても一年生が90分間静かに能動的に講義を受けられない等の不適応が見られる。これは、入学前のイメージと現実のギャップによる「修学に対するリアリティショック」が原因で学修意欲の減退が起きているのではないかと考えた。【目的】入学前の学業イメージや期待が、入学後変化し学修意識に影響しているか明らかにする。【研究方法】1年生を対象に平成27年12月、入学前後のイメージ変化、生活、勉強などについて、独自に作成したアンケートを実施し分析した。研究は本学倫理審査委員会の承認を得た。【結果】回答数は68であった。入学前とのイメージの違いは82%、生活環境の変化がなかった学生は13%であった。学修では「勉強方法が分らない」「学ぶ分量が多い」「専門教科が難しい」が54%と半数以下であった。職業決定を家族や親戚、教員の勧めが35%、入試区分は80%がAOと推薦入試であった。入学前の不安は「勉強」「友人関係」で80%を占めた。【考察】本学の学生はAOや推薦入試で早期に進学先が決定し、自己学習を身に付けていないまま大学生となったことで、入学後の学修のイメージのギャップが大きいことが、学修意欲へ影響していると考えられる。また、35%の学生は、進路決定が自己の希望でなく家族や親戚、教員の勧めで職業選択していることも、大学の授業内容や看護師の仕事に関する情報収集不足から、予想以上専門教科の難しさを感じ、リアリティショックに繋がっていると推察される。「友人関係」はこの時期には避けられない成長課程の問題でもある。【結論】勉強理解と友人関係で入学前のイメージと現実のギャップが大きかった。入学後、勉強方法に悩む学生がいることが明らかになった。

本研究は平成27年度学内研究助成「教育改革を志向した研究」として行った。

看護教育における授業開発と学習支援システム

寺谷 愉利子

看護学部

論者は34年間の病院勤務中に教育学を修得したのち、教育学を基盤に大学で看護教育に携わり10年となった。当大学では、着任した2010年から「Surface Learning 暗記学習」ではない「Deep Learning 意味学習」の「授業開発」に取り組み、教育・実践している。しかし、前向き研究としての授業実践研究は研究倫理審査上難しく、論者はその成果研究を報告する機会がなかった。

昨今、高等教育の質保証や教員のコンピテンシー、「授業開発」を求める時代の波が押し寄せている。当大学でも、「FD (Faculty Development)」「IR (Institutional Research)」が重要視され、論者の授業開発の成果データを使った後ろ向き研究は当大学の倫理審査で許可された。そこで、当大学で取り組んだ「看護教育における授業開発」と「授業開発での学習支援システムの活用」の事例紹介と「授業開発と学習支援システム」の展望について報告する。